

## 第III章 遺 跡

### 1 遺 跡 序 説

今回報告する調査地は、宮城の各地域におよんでいる。すべての調査が宮城門と宮の大垣の実態を把握することを目的としていた。調査結果はおおむね初期の目的を達し得たものであり、宮城門3・脇門2、そして宮の大垣を南面・西面・北面で確認することができた。しかし、それぞれの調査地が宮の大垣に近接した地域であったため、建物遺構は概して少なく、またその重複関係もほとんど認められなかった<sup>1)</sup>。発掘総面積298.2aに対して検出したおもな遺構は建物22、築地3、塀22、溝15、井戸14、土塹10である。

遺構各説においては、調査次数の順でなく、朱雀門地区(第16次・17次)、玉手門地区(第15次)、佐伯門地区(第25次)、西南隅地区(第14次)、玉手門・佐伯門中間地区(第18次)、北面大垣地区(第23次)の順で述べ、その後その他の地区を述べることにする。

それぞれの地区での遺構は番号順に説明し必要に応じて遺構相互の関係にもふれる。

検出した遺構の種類は上掲のとおりであり、用語については『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に準じたが<sup>2)</sup>、今回の報告ではとくに掘込み地業、版築の用語を使用した。

基壇を築くためには、ほぼ基壇の大きさに地耐力の十分な地山が露出するまで掘鑿する。そしてその底から粘土・山砂を1～2cm、厚い場合は10cm程度の厚さに積んで突き固め、これをくりかえす。このような一連の地業を「掘込み地業」とよび、薄く盛った土を層ごとに突き固めていくことを「版築」と称する。版築は「掘込み地業」内のみで行われるのではなく、基壇地上部分、また大垣や宮内の築地においても行われている。

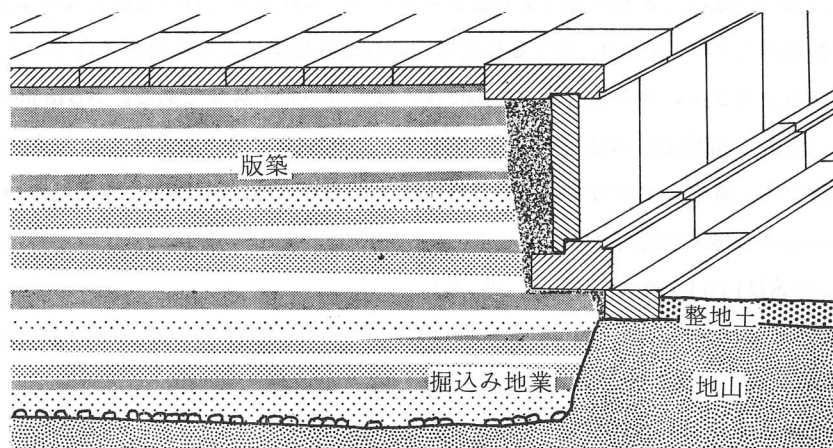


Fig. 9 掘込み地業による基壇模式図

1) 第14次調査においては、下層から埋葬施設を含む弥生時代後期の大規模な集落跡を発見しているが、この報告は別の機会にゆずる。横山浩一・工楽善通「昭和39年度平城宮跡発掘調査概

要」(『年報』1965年) pp.30。

2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』内裏北外郭の調査 奈良国立文化財研究所学報第26冊 pp.21。以下『平城宮報告』と略す。

掘込み地業  
および版築

## 2 遺 構 各 説

### A 朱雀門地区 (6ABX, 6ABY区)

調査地は宮南面中央門地区であり、南北約130m、東西約80mの広大な地域である。この地域の現状は水田がほぼ平坦に連なっている。遺構検出面は、おおむね表土面下 30~40cm にある暗褐色ないし灰褐色の粘質土面であるが、南半部では後世の整地土直下の砂質土(地山)面が遺構検出面となった。地山面の比高差は、当発掘地の南北距離約 130m の間で、北端と南端とでは約0.2m程度であり、おおむね平坦であるといえよう。

検出した主要な遺構は、宮南面中央門(朱雀門) SB1800とそれにとりつく南面大垣 SA1200、SB1800の中心から東西それぞれ約29m離れた位置で SA1200 に開く脇門 SB1801・1802、SB1800の北にのびているバラス敷き宮内道路(SF1950)の両側溝SD1860・1900をはじめとするいくつかの溝、SB1800基壇上に設けられた塀 SA1812、また SB1801の北約 9 m の位置にある東西塀 SA1765などがある。また広場 SH1850は門のすぐ北側にあり、SD1790 と SD1890 とが広場の東西を画している。

#### SA1200 (PLAN. 2・4, PL. 3・6)

宮の南面大垣であり、基底部分と北側犬走り部を検出した。これは第14次調査地域(6ADH)で検出した大垣の東延長部である。基底部分はおおむね北半部を検出したにすぎないが、SB1800(朱雀門)東妻にとりつく部分ではSB1800の南北心から1.75mの位置に北縁がある。この位置では、心を折り返した3.5mの幅に復原できる。大垣北縁はSB1800の東約12mの位置で約0.4m、角をもって南によるので、南面大垣は、基底部分幅がSB1800よりがとくに広がっていたことがわかる。大垣基底部分と北側雨落溝との間は約3.5mが平坦面で、犬走りとなっている。

大垣北側一帯は宮当時の旧地表と地山がほぼ一致し、砂混りの黒色粘質土からなり、この上面から大垣基底部分とほぼ同じ範囲で深さ0.35~0.4mに掘込み、そのなかを丁寧に版築している。築土は掘込み線の約3.5m北側まで広がっており、これが犬走りの基礎となっている。なお、大垣掘込み地業はSB1800と接する位置でその掘込み地業によって切断されている。

大垣心から北約 5 m にある東西溝(幅約0.5m)は大垣の北雨落溝である。SB1800の東では(溝の深さ約0.2m)基壇東縁には達せず北へ斜行し、SB1800基壇の東約 5 m にある南北溝 SD1790に接続する。溝中には藤原宮式瓦が多量に落ちこんでいた。SB1800の西側においても(溝の深さ約0.4m)SB1800基壇西縁には達せず、約13m西側で南北溝SD1890に接続する。

#### SF1761 付 SD1764 (PLAN. 2・4, PL. 9)

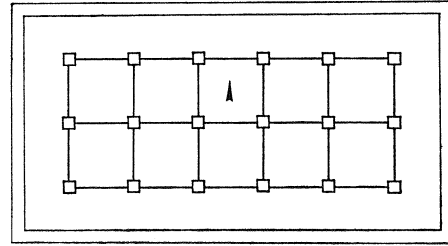
SB1800東の宮内東西道路である。路面幅は約6.5mある。SA1200北雨落溝を南側溝とし、SD1764(幅0.8m強、深さ0.2m)を北側溝としている。

#### SA1765 (PLAN. 2・4, PL. 9)

宮内道路 SF1761 の北側溝(SD1764)にちかく設けられた掘立柱東西塀である。西端は南北溝 SD1790 に接し、発掘区内で柱掘形を 4 間分検出したが、さらに東へ延びるであろう。柱掘形は長方形(1.2×1.7m前後、深さ0.8m)で大きい。柱根は残っていないが、各掘形からみて、柱間寸法は2.76mとなる。

**SB1800 付 SD1763 (PLAN. 2・4, PL. 3～6)**

宮の南面中央門、即ち朱雀門である（以下SB1800は朱雀門と称する）。礎石の抜取り痕跡を東西方向（桁行）で5間分、南北方向（梁行）で1間分、それぞれ5.05m間隔で検出した。南の列はSA1200の中心にあたるので、梁行2間に復原できるが、これは発掘区外である。根石は20～

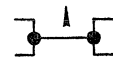


35cm大のものが多く、強く突き固められた褐色含礫土面で検出した。基壇の基礎は掘込み地業がなされている。掘込み地業の範囲は、梁行中央柱列を折返すと16.2mになる。掘込み地業に際しては褐色砂質土の地山面まで削平排土し、この面からほぼ基壇の範囲を1.5～1.6mの深さで穴を掘り、底にまず10～30cmの礫をおき砂質土や小礫を含んだ土で互層に築きあげていく。それぞれの築土の厚さは薄いところで約8cmであるが、厚いところでは50cmちかくある。

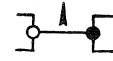
門の平面規模は桁行方向で25.25m、梁行方向で10.10mあり、柱間寸法は桁行・梁行ともに5.05mの等間になる。基壇はその出を約4mとした場合、ほぼ東西33.25m、南北18.10mに復原することができる。この規模は、掘込み地業の大きさとおおよそ一致する。北面階段の痕跡は確認できなかった。基壇検出面から出土する瓦は藤原宮式のみである。基壇の北に接する東西溝SD1763（幅0.9m強、深さ0.3m）は雨落溝の位置、あるいは基壇地覆石もしくは延石が据えられていた位置に相当するが、地覆石や延石を抜き取った痕跡は認められない。また基壇の位置をはずれると幅約0.5mと狭まってSF1761中央部を東方へ続くので雨落溝とも決めがたい。

**SB1801 (PLAN. 2・4, PL. 3・7・8)**

朱雀門の東脇門である。朱雀門との心々距離は28.9mある。南面大垣SA1200の心にあわせて掘立で親柱2本をたてた穴門である。柱掘形（径0.7m、深さ0.6m）には柱根（径0.4m）がいずれも残っていた。柱間寸法は4.3mである。柱の下に直径20～30cmの石や丸・平瓦を入れこんでいる。柱の高さをそろえるためであろう。柱の内側北に接して凝灰岩切石（東40×50cm、西30×40cm、厚さ東西とも15cm）が据えられている。これは扉の取付けのための唐居敷の礎石である。

**SB1802 (PLAN. 2・5, PL. 7・8)**

朱雀門の西脇門である。SB1801と同じ掘立柱立ちであるが、後世の攪乱のため、東の柱掘形（径0.4m、深さ0.65m）を検出したのみである。柱（径0.3m）は柱掘形の底にそのまま据えている。朱雀門と東脇門の心々距離を折り返すと検出した柱の西2.3mの位置になるので、朱雀門の東西等距離に両脇門が設けられたことが明らかである。柱の内側には大小（径10～40cm）の石を数個おいている。

**SA1812 (PLAN. 2・4, PL. 3・5・8)**

朱雀門基壇北縁に設けられた方形掘形（1辺0.5～0.7m、深さ0.4m）の東西堀であり、7間分検出した。東端の掘形が基壇東北隅にあるので、さらに2間分西にあった可能性が認められる。東第1・4掘形以外の6個に柱根が残っていた。いずれも1辺20cm前後の角柱である。

- 3) 模式図の記号 ●柱根をとどめる掘形 ○柱痕跡をとどめる掘形  
○掘立柱掘形 □礎石抜取り痕跡 …推定 ▲は北をしめす。

**SD1825** (PLAN. 2・4, PL. 4・12)

朱雀門の基壇西端近くを掘込んだ南北溝(幅2m, 深さ0.2m)で, 朱雀門廃絶後のものである。溝の北端は朱雀門の北約6mの位置にある。溝の中で角柱状木材を2本ずつ2ヶ所(SX1831・1832)に据えた状況で検出した。また直径10~20cmの礫が散在しているが, これは朱雀門西北隅の根石が落込んだものであろう。

**SX1830** (PLAN. 2・4, PL. 4・12)

SD1825の北端近くで, この溝をまたぐように設けられた掘立柱2本の構築物である。柱掘形はやや不整形(径1.1m~1.2m, 深さ1m)で漏斗状に掘込まれている。柱根(径東0.5m, 西0.4m)がいずれも残っており, 先端を尖らせている。

**SX1831・1832** (PLAN. 2・4, PL. 4・12)

SD1825の底に角柱状木材を2本ずつ据えた施設である。角材はいずれも幅25cm, 長さ75cm, 厚さ20cm前後のものである。角材よりひと回り大きい掘形を掘り, 角材の上面が10~15cm溝底より上になるように据えている。SX1831とSX1832とは約5m離れており, それぞれの角材の間隔は1mある。SD1825の深さからして, これらの角材は木樋据えつけの台と考えられ, SX1830は木樋に関連した施設, 例えば宮廃絶後の開田に伴う灌漑用水汲上げのための水車の支柱のごときものが考えられる。

**SH1850付SD1790・1810・1890・1910** (PLAN. 2・4, PL. 4・10)

朱雀門北側の広場で, 東西51m, 南北37mの範囲である。東は南北溝SD1790(幅1.2m, 深さ0.6m)で, 西は南北溝SD1890(幅0.8m, 深さ0.6m)で画し, 北は東半を東西溝SD1810(幅0.8m, 深さ0.1m)で, 西半を東西溝SD1910(幅0.7m, 深さ0.15m)で画し, 中央部は南北道路SF1950に連なる。この広場は朱雀門の心に対称ではなく, 西が9m広く, 西を画す南北溝SD1890を西脇門SB1802の西柱位置に合わせている。

**SX1891** (PLAN. 2・5, PL. 11)

SD1900Aの6ABY区中央部で杭と小枝を使用した堰を検出した。SD1900Aを横断して幅2.3~2.5mで3段に組まれている。その状況はかなり密で, 直径約8cmの杭を5本ないし6本打込み, それに小枝を交互に通して編むようからみつけている。各段の間隔は約0.5mである。3段目の南側は水流によって溝底がえぐられ, 約0.2mの段差が生じている。

**SK1949** (PLAN. 2)

直径約0.8mの小土壙である。検出面からの深さは約0.1mで浅い。玉石数個とともに, 須恵質の家形陶棺蓋の破片が発見された。なお, この陶棺と同一個体の破片がSD1900の北端部からも出土している。

**SF1950** (PLAN. 2・3, PL. 10)

朱雀門北の南北宮内道路である。広場SH1850から連なるものであり, 東を側溝SD1860(幅4.5m, 深さ0.1~0.25m)で, 西を側溝SD1900(幅2.8~3.0m, 深さ0.6~0.8m)で画しており, 道路は幅約10mある。地山直上に灰褐色粘質土の整地土があり, この上面にバラスを残すところがあるが, これは広場SH1850内の南北溝SD1844(幅0.5m, 深さ0.1m)・1944(幅0.5m, 深さ0.1m)間で顕著である。これら2条の溝は断続的に北に延びており, 宮の造営当初にSD1860とSD1900が両側溝であったものを, 後にSD1844とSD1944に改めたと考えられる。

ここで当初の側溝について述べておこう。SD1900はSD1860西方約21mにある南北溝で時期を違えて上下(A・B)に重なっている。SD1900Aは幅2.8~3.0m、深さ0.6~0.8mの大規模な溝である。砂あるいは砂質土が数層堆積し、調査地域のほぼ全域の流路から多量の土器が出土した。またSD1900Aに設けられた堰SX1891上流のくぼみから木簡が9点出土した。このSD1900Aの調査地域での南端部は朱雀門基壇築成時に断ち切られている。したがってSD1900Aは宮造営前の溝である。造営後、この溝は埋め立てられ、宮内道路SF1950の西側溝(SD1900B)として再使用されるが、朱雀門の北方約37mの地点で西折し南北溝SD1890に接続する。東側溝SD1860はもともと浅い溝であり、後の削平のためSH1850内では検出できなかったが、SH1850内では、SD1900同様埋め立てられたものと考えられる。そして東西溝SD1810から南北溝SD1790へ接続させている。なお、SD1860とSD1900Aにはさまれた幅21mの間は大和盆地を縦断していた下ツ道と推測できる。

## B 玉手門地区(6ADF区)

調査地は宮の西面南門地区で、発掘区は東西約30m、南北約120mの狭長な範囲である。

遺構はおおむね、やや砂質の暗褐色土面で検出したが、困難な部分では地山面である黄褐色粘質土面で検出作業を行なった。

検出した主な遺構は宮の西面中央門(玉手門)SB1616と、西面大垣SA1600である。SB1616には礎石や根石、また基壇にともなう施設も残存せず、基壇の掘込み地業部分を検出し得たにすぎない。その他、西面南門北方の官衙を区画するかのように門の北側約14mの位置に東西堀SA1692がある。このSA1692の北に2棟の南北棟建物SB1711・1717を検出している。発掘区北端は旧秋篠川川床SD1759がある。SA1692の南では、小穴や小井戸が多い。

### SE1588 (PLAN.6・7, PL.17)

発掘区の南辺部で、小規模な井戸5基を検出した。SE1588は直径1.2m、深さ約0.8mの穴を掘り、曲物側板を2段据え、その上部に平瓦を曲物の外縁にそうようにめぐらせた井戸。曲物は下段が直径34cm、高さ16cm、上段は直径36cm、高さ20cm。

### SE1591 (PLAN.6・7, PL.17)

穴の底に径約20cmの河原石を円形に1段めぐらせ、その上に約0.5m平瓦を小口平積みにし、最上部に径約10cmの玉石を1段めぐらせた井戸。上縁の内径0.8m、底の内径0.5m、深さ約0.7m。

### SE1595 (PLAN.6・7, PL.17)

河原石積みの上部に瓦を平積みにした円形の井戸。上縁部の内径0.7m、深さ約0.5m。底に玉石を敷き、中央部を約0.1mくぼませ曲物の側板を据えている。

### SE1596 (PLAN.6・7, PL.17)

1辺1.3m、深さ2.8mの隅丸方形の穴を掘り、中央に径37~41cmの曲物の側板を8段以上積んだ井戸。高さは一定せず、8段の総高は1.9m。曲物には底板を固定するための釘穴がなく、これらが容器の転用でない点は興味深い。

### SE1598 (PLAN.6・7, PL.17)

長径1.2m、短径0.9m、深さ1.7mの楕円形の穴を掘り、西寄りに曲物の側板を7段以上積

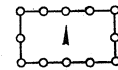
んだ井戸。曲物の直径は最小25cm，最大45cm。上段に従うほど大きな物を積む。7段の総高約1.1m。

#### SA1600 (PLAN. 6・7, PL.13)

宮の西面大垣であり，築地基底部を検出した。構築にあたっては地山面まで削平し，この面から0.1~0.2m掘込み，粘土混りの砂質土を約0.2m積み，この上に小礫を混えた土を版築している。掘込み地業東縁のさらに東に築土が延びるので，犬走り部は掘込み線の東へ大きく出ているものと考えられるが，削られているためその規模は定かでない。掘込み地業の西縁は発掘区外になるが南面大垣SA1200と同規模であろう。

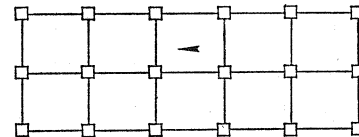
#### SB1613 (PLAN. 6・7, PL.13)

SB1616基壇の東南隅に一部かかる東西棟4間(7.4m)×2間(4.1m)の掘立柱建物である。柱間寸法は一定でないが，桁行・梁行ともに約2mである。柱掘形は小さく(径約0.3m強，深さ0.1m)不ぞろいである。柱根は残存しない。



#### SB1616 (PLAN. 6・7, PL.13・14)

宮の西面中央門，即ち玉手門である(以下SB1616は玉手門と称する)。基壇上部は全く削平され，礎石や根石は残っていないが，基壇の掘込み地業が行われているため，



その輪郭によって門の規模の推定が可能である。基壇掘込み部の規模は南北約32.1m，東西は発掘区内で7.6mである。SA1600入隅との距離は5.6mあり，西面大垣基底部幅を2.7mに復原すれば玉手門掘込み地業の東西幅は13.9mに復原できる。玉手門掘込み地業はSA1600と接する位置ではSA1600の掘込み地業を切断している。玉手門の掘込み地業の深さは，検出面から0.55~0.6mである。底部に青色粘土塊を混入した灰黒色粘土を約0.2mおいた後，砂質土，粘質土，あるいは含礫土を互層に版築していく。全体に丁寧に行われており，厚い層で0.15m，最も薄い層では部分的にはあるが0.05m未満である。

#### SK1623 (PLAN. 6・7, PL.16)

玉手門の正面，発掘区東端で検出した東西4m，南北4.6m，深さ1mの長方形の土壙である。土壙内には周囲から投げこんだ状態で5層にわたる堆積土が確認された。平安時代の土器が出土している。

#### SE1627 (PLAN. 6・7)

玉手門の前面にある井戸。井戸枠はすでに抜きとられており，長径4.5m，短径2.2mの東西に長い楕円形の浅い(深さ0.3m)抜取り時の土壙の西に寄って1辺0.7mの方形の土壙(深さ0.5m)があり，これがもとの井戸の規模にちかい。埋土から砥石・鎌・土釜が出土した。

#### SK1636 (PLAN. 6・7)

SK1623の北で検出した1辺約2m，深さ約0.2mの小土壙である。長径0.3~0.4mの玉石が5個あり，根石のようにみられるが，これに組合うものはみられない。

#### SD1668 (PLAN. 6・8)

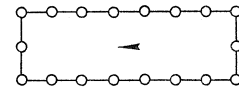
SB1616東北10mの地点から掘られた東西溝である。幅2.5mあるが，発掘区東端での深さが約0.15mで，ごく浅い溝である。溝の埋土から，8世紀の須恵器，土師器片とともに瓦器片，10世紀の黒色土器片が出土している。

**SA1692** (PLAN. 6・8, PL.14)

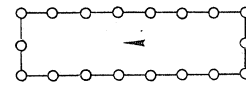
SB1616の北約15mの位置で大垣SA1600にとりつく形で設けられた掘立柱東西塀である。11間分検出したがさらに発掘区外東方に延びる。柱掘形の大きさは一定でない(0.75×0.7~1.4×0.8, 深さ0.5m), 柱根は西第3・5掘形に残る。2本の柱根間が4.7mあり, 各柱間は2.35mに復原できる。なお, この塀の西に接して柱掘形が2個ある。東の掘形には柱根(径0.15m)が残るが, 掘形は円形(径0.6m)で浅く(深さ0.2m), SA1692と状況が異なり柱間寸法もやや短かい(2m弱)。また, 西の掘形は大垣SA1600の位置に, 東の掘形は犬走りの推定位置にあるので, SA1692とは別個のものともみた。

**SB1711** (PLAN. 6・8, PL.15)

SA1692の北にある南北棟7間(16.1m)×2間(5.2m)の掘立柱建物である。北2間目に間仕切りがある。柱間寸法は桁行方向が2.3m(7.5尺)等間, 2.6m(8.5尺)等間である。柱掘形は方0.5~0.9m, 深さ0.2~0.4mである。柱根は残存しない。

**SB1717** (PLAN. 6・8, PL.15)

SB1711の西にある南北棟7間(16.8m)×2間(4.8m)の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行, 梁行ともに2.4m(8尺)等間である。柱掘形(方0.8m, 深さ0.3m)は方形である。柱根は残存しない。

**SK1741** (PLAN. 6・8)

SB1717の西北で検出した長方形(3.2×2.6m)の浅い(深さ0.1m)土壙である。底に小石が数個みられる。埋土から瓦質土器が出土している。中世の土壙である。

**SE1748** (PLAN. 6・9, PL.17)

P地区北半部の井戸である。直径1.1m, 深さ1.2mで川原石(径10~20cm)を組み上げた中に, 1辺約0.85mの竪板組の井戸枠がある。柱を4本立て, 上部を横木で桷留めし, 外側から竪板をあてている。おそらく当初, 石組で築いたものを後に竪板組で補強修理したものであろう。底には直径45cm, 高さ28cmの曲物の側板を据えている。板組井戸の方位は北で西へ大きく振れている。瓦器片が出土している。

**SE1749** (PLAN. 6・9)

SE1748の西に近接して設けられた竪板組の井戸である。枠板は1辺0.6mで組んでおり, 各隅に柱を立て, 上部と下部に横木を桷留めし, 各辺外側から竪板を2枚ずつ立てている。底に曲物はない。

**SE1758** (PLAN. 6・9)

SE1749の北約10mにある。上径2.3m, 底部径1.2m, 深さ1.2mの土壙状であるが, 枠板が抜きとられた井戸である。

**SD1759** (PLAN. 6・9, PL.16)

発掘区の北端を西北から東南方向に斜行する川である。発掘区内では右岸を検出したのみであり, 左岸は発掘区外である。岸から最も深いところで0.8mである。堆積土は砂質土であり, 瓦器や羽釜が包含されている。

## C 佐伯門地区 (6AAD・6ADE区)

調査地は宮の西面中央門地区であり発掘区は東西約 30m、南北約 120m という狭長な範囲をしめる。水田面では発掘区北端と南端とで約 1 m の高低差がある。遺構検出面の傾斜は北から南へ緩傾斜で下がり、北端と南端とでは約 0.5m の高低差がある。

遺構の検出は、床土直下に中世以降の遺物を混えた 15~30cm の厚さの堆積土を排除して黄褐色粘質土面で行なった。この土層は北方ではおおむね暗褐色粘質土であるが、南方は漸移的に細砂を含む整地土である。南端ちかくでは秋篠川水系の旧河道を埋めたてている。

検出した主要な遺構には宮の西面中央門(佐伯門) SB3600がある。礎石や根石は残っていないが、基壇の基礎地業を明瞭に検出することができた。この門にとりつく西面大垣 SA1600は、宮跡西辺の県道がこの地域で東に寄っているため、検出できなかった。SB3600 の東 15m の位置には、南北塀 SA3590・3680 が発掘区を縦断する形で存在するが、門を入った位置で 10 間分約 26m が開放され、通路となっている。検出した建物跡はすべてこの 2 条の塀の東側にあり、南半部では SB3560・3599・3640 を、北半部では SB3690 を検出した。

この他、南北塀 SA3555・3557・3563・3621、東西塀 SA3567・3642・3669・3671・3673 等があり、井戸として SE3595・3605 がある。

### SA3555 (PLAN. 6・10, PL. 22)

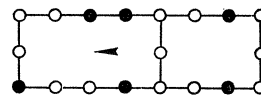
発掘区東南隅の掘立柱南北塀である。掘形(方 0.7m、深さ 0.3m)を 5 間分検出したが、さらに北へ延びるものと思われる。南第 4 掘形にのみ柱根小片が残っていた。柱間寸法は不ぞろいだが、5 間分で 13.7m ある。

### SA3557 (PLAN. 6・10, PL. 22)

SA3555 の西 2 m の位置に近接して設けられた掘立柱南北塀である。SB3560 の西側柱が重複しており、SB3560 に先行するものである掘形(方 1 m、深さ 0.15m)を 4 間分検出したが、南へさらに延びるものと思われる。北第 1・第 2 掘形の間隔は 2 間分あり、中間の柱掘形はおそらく浅いために、すでに削平を受けたものと考えられる。いずれの掘形にも柱根は残っていない。検出した部分での長さは 10.95m である。

### SB3560 (PLAN. 6・10, PL. 22)

SA3557 の廃絶後に建てられた南北棟 7 間 (15.6m) × 2 間 (4.75 m) の掘立柱建物である。南 3 間目で間仕切られている。掘形は長方形 (0.7×1.0m~0.9×0.7m、深さ 0.3~0.4m) で 6 個の掘形に柱根(径 0.15~0.25m)が残っている。



### SA3563 (PLAN. 6・10, PL. 22)

SB3560 の北半部で東側柱筋の 0.7m 西に重複する掘立柱南北塀である。7 間分検出したが、発掘区外の北にさらに延びる可能性がある。柱掘形の重複関係によって、SB3560 に先行するものであることが明らかである。掘形は方形(方 0.8~1.2m、深さ 0.2~0.7m)である。柱根は残存しない。柱間寸法はやや一定を欠くが、検出した部分では約 3 m 間隔である。

### SA3567 (PLAN. 6・10, PL. 22)

SA3563 と直交する掘立柱東西塀である。掘形はきわめて不整形で小さく浅い。円形に掘ら



れているものは約0.6m、方形のものは一辺約0.5mである。深さは0.2m前後である。7間分検出したが、中1間分は後の削平によってか検出できなかった。7間分の長さは19.7mである。

#### SK3573 (PLAN. 6・10)

SA3567の北の土壙である。長径3.1m、短径2.9mの楕円形で、底部は長径1.4m、短径1.1mの平坦面である。深さは1.3mである。埋土中には8世紀の瓦片や土師器片が混入している。

#### SA3590 (PLAN. 6・10・11・12, PL.18)

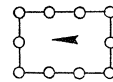
発掘区K・L・M地区の中央で南北に長く連なる掘立柱塀である。25間分を検出した。南端は秋篠川の旧河道にあたり、その攪乱によって不明瞭である。北端の柱掘形はSK3650の南際にあるが、このSK3650掘さく時にいくつかの柱掘形が消滅した可能性がある。柱掘形は方形（方1.2m～1.5m、深さ0.8m）である。柱根は残っていない。柱間寸法は一定でないが25間分での長さは67.2mある。

#### SE3595 (PLAN. 6・10・11)

上縁の直径約2m、底部の直径約0.8m、深さ0.7mの円形の穴である。底部に玉石があり、曲物側板の断片が出土しているので、井戸と考える。瓦器・砥石が出土した。

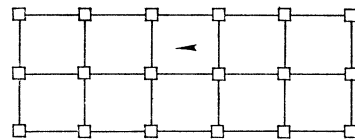
#### SB3599 (PLAN. 6・10・11, PL.21)

L地区中央部西端にある南北棟3間(5.4m)×2間(3.6m)の掘立柱建物である。柱間寸法は1.8m(6尺)である。柱掘形は小さく(径0.6m～0.7m、深さ0.2m)、小規模な建物である。



#### SB3600 (PLAN. 6・12, PL.18～20)

宮の西面中央門、即ち佐伯門である(以下SB3600は佐伯門と称する)。基壇上部は全く削平され、礎石や根石は残っていないが、基壇基礎築成にあたっての掘込み地業



が行われており、その輪郭によって門の規模を推定できる。掘込み地業の規模は南北が29.4mである。東西は東辺が発掘区外にあるため確定できないが、発掘区内では約4.7m分を確認した。西面大垣SA1600は、この4.7mの中では検出できなかった。門へのとりつき位置はおそらく玉手門と同じ位置と考えられ、佐伯門の掘込み地業の東西幅は玉手門とほぼ似た数値(13.9m)と考えられる。佐伯門の掘込み地業は上部が削平されているので、そのもとの深さは不明であるが、遺構検出面である黄褐色粘質土面からは0.7m残存し、底面は灰色砂質土に達している。掘込まれた底部には、まず黒色砂質土を0.06～0.15mほど積んだ後、粘質土、山砂等を版築していく。丁寧に築成されており、最も薄い層では0.05mに満たない。中央部においては、版築層は27層を数えた。基壇周囲の施設は、基壇外構に伴う石材、雨落溝等検出できなかった。玉手門と比べると、南北方向は約2.6m短い。

#### SE3605 (PLAN. 6・10・11)

1辺約1.2mの方形の穴を掘り、横板を組んだ井戸。深さ約0.3m。底に直径10～20cmの河原石を敷く。枋板は腐蝕が著しく、最下段の一部を残すにすぎない。瓦器が出土した。

#### SD3610 (PLAN. 6・11)

SB3599の北にある東西溝(幅1m、深さ0.1～0.15m)である。発掘区を横断するが、東で北へわずかにふれる。

**SA3621** (PLAN.6・11)

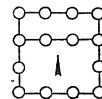
SD3610の北で発掘区の西端にある南北塀である。柱掘形は方形(方0.5~0.8m, 深さ0.2m)である。柱根は残存しない。3間分の長さは5.5mである。

**SD3630** (PLAN.6・11)

K地区からL地区にかけての南北塀 SA3590の西にある南北溝である幅0.9~1.1m程度であり, 深さは0.1mに満たない浅いものである。

**SB3640** (PLAN.6・11, PL.20)

K地区で南北柵SA3590の東にある東西棟3間(6.3m)×3間(6.3m)北廂つき掘立柱建物である。柱間寸法は桁行・梁行ともに2.1m(7尺)等間である。



**SA3642** (PLAN.6・11, PL.20)

SB3640の北にある東西塀である。南北塀SA3590の東際に西端の柱掘形があり, 東へ4間分検出しているが, さらに発掘区外へ延びる可能性がある。柱掘形は方形(方0.5m, 深さ0.2m)である。4間分の長さは8.2mである。

**SK3650** (PLAN.6・11・12, PL.20)

南北塀SA3590の北端に掘られた東西8.2m, 南北7.3mの楕円形の土塋である。深さは0.2mほどであり, さほど深くない。埋土は黄灰褐色砂質土であり, 遺物は少ないが, 黒色土器, 磁器片が含まれている。平城宮廃絶後の土塋である。

**SA3669** (PLAN.6・12, PL.19)

Q地区南辺で佐伯門の東にある東西塀である。7間分検出しているが, さらに東方に延びる可能性が認められる。柱掘形は不整形で小さい(径約0.5m, 深さ0.15m)。7間分の長さは12.3mである。

**SA3671** (PLAN.6・12, PL.19)

SA3669の北にある2間の掘立柱東西塀である。柱掘形の規模はSA3669とよく似ている。2間分で4.4mである。

**SA3673** (PLAN.6・12)

SA3671の北にある掘立柱東西塀である。4間分を検出したが, さらに東方へ延びる可能性がある。柱掘形は円形できわめて小さい(径約0.4m, 深さ0.15m)。4間分の長さは8.6mである。

**SK3675** (PLAN.6・12)

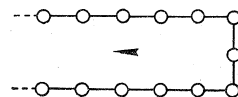
直径2.4m, 深さ0.4mの土塋である。底は楕円形になる。底面南辺に径10cmの石が十数個ある。

**SA3680** (PLAN.6・12, PL.18)

Q地区中央で長く連なる掘立柱南北塀である。9間分検出した。柱掘形は方形で1辺1.2m以上, 深さ0.5mのものが多いが, 不整形である。柱根は残存しない。柱間寸法は一定ではないが, 南辺の一部を検出した北端の掘形を除いた8間分で長さを求めると21.6mになる。

**SB3690** (PLAN.6・12, PL.21)

Q地区でSA3680の東側にある南北棟6間以上(5間分13.25m)×2間(5.3m)の掘立柱建物である。柱間寸法は2.65m(9尺)等間である。なお, 北側の第51次調査で北妻を検出し, 桁行15間であることがわかった。



## D 宮西南隅地区 (6ADH区)

調査地は宮の西南部であり、宮の西南隅確認を目的として調査を実施した。この地域は宮域内でも比高が低く、もともと低湿な地であったようである。遺構検出面は、耕作土面からおおむね0.8mの深さであり、検出作業は灰色砂質土、あるいは黄色粘質土の上面で行なった。

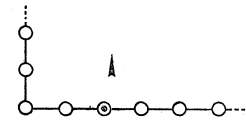
当地区の西南隅、南北約30m、東西約55mの範囲は空地となっており、遺構の存在はほとんど認められない。その北方では掘立柱建物を8棟、南北塀1条を検出し、東方のF地区では掘立柱建物SB1220とSB1222の2棟があり、これらに伴う塀を3条検出した。また、このF地区では、小規模な井戸SE1230・1247の2基を検出した。SE1230の枠板には彩色をもつ木製の楯が転用されていた。また、発掘区の南をかぎる農道と水路の南に2か所小規模なトレンチを設定し、南面大垣の堀地および外堀(二条大路北側溝)の一部を検出した。

**SA1200** (PLAN.13・14~16, PL.23・24)

宮の南面大垣で、発掘区の南辺に東西全面にわたって検出した。これは宮中央部の6ABY区で検出した大垣に連なる。南縁は現灌漑用水路で破壊されているが、基底部の築土をほぼ8.5mの幅で検出した。基底部は層状のいわゆる版築ではなく、ブロック状の粘土をつき固めたもので、検出した厚さは70~80cmにおよぶ。大垣本体は削平されているが、発掘区のなかほど、I地区で大垣の基底部幅2.7mと北側の犬走り3.5mが確認された。付近から多量の瓦が出土しており、大垣は瓦葺きであったことがわかる。寄柱の痕跡は明らかにし得なかった。犬走りの北縁で断続的に連なる東西溝(幅0.8~1.2m、深さ0.1~0.2m)は大垣の北雨落溝と考えられる。

**SB1220** (PLAN.13・14, PL.25)

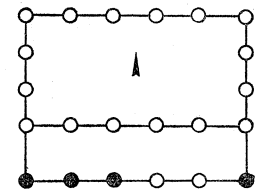
F地区東北隅で検出した東西棟6間以上(13.32m以上)×3間以上(5.32m以上)の掘立柱建物である。柱間寸法は2.66m(9尺)等間である。柱掘形は不整形で大きさも一定でない。西第3掘形に柱痕跡(径0.2m)を残す。SB1220の西妻柱筋は、この南で検出したSA1222の妻東柱筋にそろえている。SB1220は発掘区外に延びるため、全体の規模は不明で、塀の可能性も残している。

**SA1221** (PLAN.13・14, PL.25)

SB1220の西妻柱列南端とSB1222の東妻柱の北端とをつなぐかのように検出された柱列である。掘形は方形(方0.6m、深さ0.15m)である。南北の2間は1.78m(6尺)で、中央間を2.07m(7尺)と広くとっており、中央を通路としたものと考えられる。

**SB1222** (PLAN.13・14, PL.25)

SB1220の西南に検出した東西棟5間(14.18m)×4間(10.91m)南廂つきの掘立柱建物である。東妻はSA1221によってSB1220と連なり、西妻はSA1240によって大垣に連なる。このSB1222は発掘区で検出した建物のうち最大の規模をもつ。柱間寸法は桁行が2.96m(10尺)等間、梁行が身舎24.2m(8.5尺)、廂の出3.65m(12尺)



である。掘形は不整形円形(径約0.9m、深さ0.5m)である。廂柱列西第1~3、及び東端掘形に柱根(径30cm)を残している。

**SE1230** (PLAN.13・14, PL.25・30)

SA1221の西側において、SB1223の北に設けられた堅板組の方形井戸である。1辺約2.1mの隅丸方形の穴(深さ約2.3m)を掘り、ほぼ中央に1辺1mの井戸枠を設けている。掘形底面に礫を敷き、幅50cm、長さ150cmの長方形板を一辺に各2枚、計8枚立てならべ、これをさらに2段に組む。なお、この井戸側板は後述するように隼人楯を転用したものであり、彩色のある面を外側にして使用してあった。各辺中央部にあたる板の合わせ目、および上下段の重ね部分には外側から板材(幅15~20cm、長さ80cm)で押えて目張りとする。側板内側の下端と中間重ね部分の2ヶ所を、角材(1辺10cm)を方形に組んだ内枠で支える。なお、上段框に当たるとみられる枠組部材が井戸底から出土している。上段の地上に近い部分はずでに腐蝕し、原状を保っていないが、側板の規格と重ねの幅によって、框から底まで2.5mに復原できる。井戸内からは、先述の内枠部材、上段側板のほか曲物の断片が出土している。

**SA1240** (PLAN.13・15, PL.25)

SB1222の西妻柱筋にそろえ、SB1222から南はSA1200に達する6間の南北塀である。柱間寸法は2.96m(10尺)等間である。柱掘形は方形(方0.8~1.1m、深さ0.25m)である。北第2・第3掘形に柱根を残し、第5掘形に柱痕跡を残している。なお、第4掘形から、6301型式および6273B型式の軒丸瓦が出土した。

**SA1245・1264** (PLAN.13・15, PL.24)

SA1200北犬走り上にある東西掘立柱列である。大垣の寄柱の痕跡かとも考えられるが、いずれの掘形も小さく(径0.4m、深さ0.15m)、柱間寸法も不ぞろいであり、決しがたい。

**SE1247** (PLAN.13・15, PL.25)

SB1222の南に設けられた堅板組の方形井戸。1辺約1.9mのほぼ正方形の穴(深さ1m)を掘り、1辺約1mの井戸枠を設けている。各隅に4本の柱を立て、中央部に横棧を桝留めし各辺外側から堅板を5~6枚ずつ立てている。枠板は建築部材の転用である。各隅の柱は仕口穴の位置と形状から榿木材とみられ、横棧は木舞とみられる。削掛けが出土した。

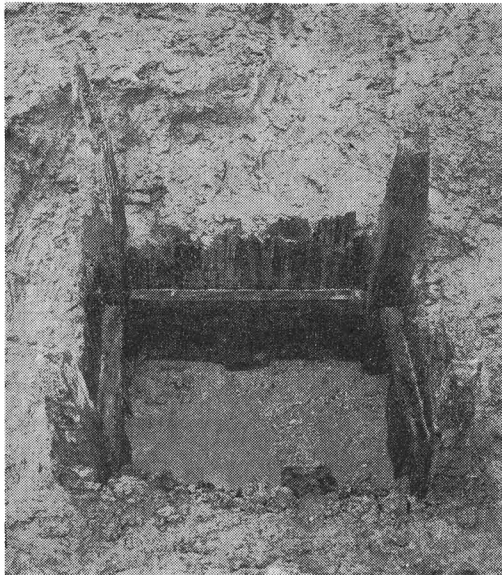


Fig.10 SE1247 西から



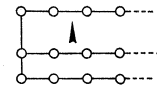
Fig.11 SE1247 南から

**SD1250** (PLAN.13~15, PL.29)

SA1200の南で検出した宮の外堀である。発掘区南限より農道と水路を隔てて設けたトレンチにおいて検出した。外堀検出を目的としたトレンチは2か所に設けたが、小規模なため、堀の北辺を確認するにとどまった。比較的良好な西トレンチでは、大垣の南端推定位置から10.5mで堀となる。この間が埴地である。

**SB1290** (PLAN.13・17)

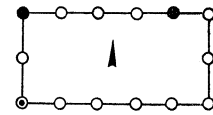
K地区西北隅で検出した東西棟4間以上(7.11m)×2間(4.74m)南廂つき掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.37m(8尺)等間、梁行2.96m(10尺)で廂は梁行1.78m(6尺)である。柱掘形の大きさは一定でない(方0.6~0.8m, 深さ0.15m)。柱根は残存しない。東方は発掘区外に延び、全体の規模は不明である。妻中央柱を欠いている。

**SE1313** (PLAN.13・16)

発掘区西南隅にある1辺2m, 深さ0.4mの瓦積み井戸。底中央に径1m弱の円形に近い凹みがあり、この部分に瓦を平積みしたとみられるが、破壊されている。曲物片が出土しており、底に曲物を据えていたものであろう。

**SB1333** (PLAN.13・16, PL.26)

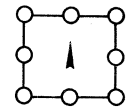
K地区でSB1290の西に検出した東西棟5間(10.4m)×2間(5.06m)の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.08m(7尺), 梁行2.53m(8.5尺)である。柱掘形は方形(方0.8m, 深さ0.3m)である。西北隅と、北側柱の東第2掘形に柱根(径20cm)を残し、西南隅掘形には柱痕跡(径23cm)を残す。

**SA1341** (PLAN.13・18)

SB1333の北で南北2個掘られた掘立柱掘形である。両掘形間の寸法は5.6mである。柱掘形は楕円形(長径1.2m, 短径0.95m, 深さ0.2m)である。柱根は残存しない。

**SB1342** (PLAN.13・18, PL.26)

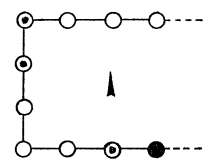
SA1341の東に近接した南北棟2間(5.4m)×2間(4.5m)の小規模な掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.7m(9尺), 梁行2.4m(8尺)である。掘形は不整円形で大きさも一定でない(径0.5~0.8m)。

**SA1345** (PLAN.13・18, PL.26)

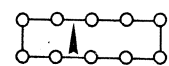
J地区中央やや東寄りで検出した9間(25.49m)の掘立柱南北塀である。柱間寸法は2.55m(9.5尺)となる。柱掘形は楕円形で不ぞろいである(長径1m~1.4m, 短径0.5~0.8m, 深さ0.1m~0.2m)。北第3・5掘形は明らかではなかった。

**SB1366** (PLAN.13・18, PL.28)

J地区の東北隅で検出した東西棟4間以上(8.85m以上)×3間(8.4m)の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.95m(10尺), 梁行2.80m(9.5尺)である。柱掘形は方形(方0.8m, 深さ0.3m)である。柱根は1本のみ残り、3個の掘形に柱痕跡をとどめる。東では発掘区外にのびている。

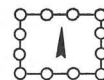
**SB1379** (PLAN.13・18, PL.28)

発掘区西北端にある東西棟4間(7.3m)×1間(1.9m)の小規模な掘立柱建物である。柱間寸法は一定でない。掘形は方形(方0.4m, 深さ0.2m)である。



**SB1397** (PLAN.13・18, PL.26)

SA1341西の東西棟3間(4.50m)×3間(3.39m)掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が東2間で1.6m,西端間で1.3mである。梁行は1.13m等間である。柱掘形は円形(径0.35m~0.6m,深さ0.22m)と方形(方0.5~0.8m,深さ0.15m)とがあり大きさも一定でない。柱根は残存しない。



**SE1410** (PLAN.13・18)

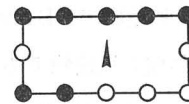
SB1414西南際の径約1.1m,深さ1.1mの円形の穴に曲物の側板を据えた井戸。掘形下半部は曲物を据えるだけの広さをもつ。曲物は3段を残す。直径34cm,高さは下段25cm,中段32cm,上段は破損のため計測不能である。砥石が出土した。

**SD1413** (PLAN.13・18)

L地区の北端部で検出した南北溝(幅1.0~1.2m,深さ0.1m)である。発掘区北端から13.5m南で消滅する。この溝はSB1379・1419と重複する。しかし,SB1419の内部を南北に通じながら,柱位置をはずれているところからみて,この建物と一連のものとも考えられる。溝埋土から,少量の土器片とともに砥石が出土している。

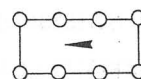
**SB1414** (PLAN.13・18, PL.27)

J地区とL地区とにかかるといわれる東西棟4間(9.52m)×2間(4.76m)の掘立柱建物である。柱間寸法は2.38m(8尺)等間である。掘形は方形(方0.7m,深さ0.3m)である。北側柱すべてと南側柱西第1・第2柱掘形に柱根(径22~27cm)を残すが,西妻中央柱の掘形は検出できなかった。



**SB1419** (PLAN.13・18, PL.28)

SB1379と重複する南北棟3間(6.5m)×1間(3.1m)の小規模な掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が2.2m(7尺強),である。掘形は円形(径0.2~0.3m)で小さい。柱根は残存しない。



**SE1422** (PLAN.13)

SB1419の西に設けられた井戸。1辺約80cm,深さ約0.3mの方形の穴を掘り,中央やや東寄りに曲物の側板(直径38cm,高さ15cm以上)を据えている。曲物は1段のみ残存し,それも上半部は腐蝕のため欠失している。埋土中から瓦片が多量に出土したので,もともと瓦組みであったものと考えられる。底から瓦器片が出土した。



Fig.12 SE1410東 南から



Fig.13 SE1422北 西から

## E 玉手門・佐伯門中間地区 (6ADE・6ADF区)

調査地は第15次(6ADF-P・R・T区)調査地区に北接する。この発掘区に南接する水田が東南方向に大きく振れており、これに連なる形で一定の幅をもった水田が宮の南端まで認められる。これは秋篠川の氾濫によるものと考えられ、今回の発掘区はこうした他と方位のふれた水田の北に連続する部分であり、氾濫の痕跡の存在が予想された。したがって調査は、そうした状況を把握することを目的としてトレンチ調査にとどめた。トレンチは中央部やや西寄りに幅6mの南北トレンチを、これと直角方向に幅3mの東西トレンチを3か所、計4か所に設定した。

発掘区全体は、宮の造営以前は南北方向の河道であり、これを宮の造営時に埋めたてているが、完全に埋めたててはならず、幅約25m、深さ約1.1mの南北に連なる凹みとなっている。

検出遺構は、発掘区中央で検出した東西塀 SA1970、この塀にかかって設けられた暗渠 SX1975、また13mほど上流に設けられた暗渠 SX1982、鍛冶工房に関係する SX1983、SK1979などが主要なものである。第15次調査で検出した西面大垣(SA1600)は検出できなかった。

### SA1970 (PLAN.19, PL.31・32)

発掘区中央部にある掘立柱東西塀である。柱掘形を SX1975 の東で 8 間、西で 3 間検出した。東第 1～3・7 掘形に柱根(径20～25cm)が残る。柱間寸法は一定でない。柱根の残る東端の 1 間は 2.35m あるが、SX1975 東の 8 間の長さは 18.45m である。

### SX1975 (PLAN.19, PL.31・32)

SA1970 西から 4 間目にこれと直交するように設けられた 2 条の南北方向杭列で、両列は 0.9 m 隔てて並列している。各列 6 本ではほぼ 0.3m 等間隔であり、この杭の両列上端が八字形に交叉するように打ちこんでいる。この両列の外側に板をおき、土盛りなどを施し、暗渠として使用したものであろう。

### SX1978 (PLAN.19, PL.32)

南北 3.5m、東西 4 m 以上の区画で方形に杭をめぐらせた施設である。西辺 10 本、北辺 15 本、南辺 14 本の杭を打ちこんでいるが、南北辺の杭列はさらに東方に延びるようである。

### SK1979 (PLAN.19, PL.32)

SX1978 内にある円形の土壙である。上縁部の直径約 1.4m で、深さは 0.7m をこえる。土壙内の堆積土中からは、金属利器のための木柄、轡口、鉾、木簡が出土している。木簡には釘に関したものが見られ、鍛冶関係工房の存在が推測できる。この SK1979 と SX1978 とは、一連のものであろう。

### SX1982 (PLAN.19, PL.32)

SX1978 の西に接して検出した杭を 2 列に打込んだ施設である。その状況は SX1975 によく似ている。両列の杭は 4 本ずつであり、その間隔は約 0.5m である。また両列の間隔を南にいくにしたがって次第に狭めている。

### SX1989 (PLAN.19, PL.32)

SX1982 の南で検出した杭を 2 列に打込んだ施設である。これは SX1975・1982 と異なり、真直ぐに打込んでいる。

## F 北面大垣地区 (6ABA・6ABN区)

調査地は宮の北面中央部やや西寄りである。この地域の地山(赤褐色含礫層)は南へ急傾斜で下がり、南北約70mの発掘区の北端と南端とでは約2mの高低差がある。地山面はちょうど大垣の推定線から南が大きく一段下がっている。6ABA区では後世の攪乱が著しく、溝・土壇・池などが随所に検出された。平城宮に伴う主要な遺構には、6ABA区北端で検出したSA2300・2330があり、いずれも北面大垣である。この北6ABN区に設けた幅3m、長さ30mのトレンチでは、北面大垣の埴地とこれに付属する施設SX2333がある。この他に小穴を検出しているが、建物遺構としてまとまるものではない。

### SA2300 付 SX2333 (PLAN.20, PL.33・34)

宮の北面大垣であり、築土が比較的良好に残っていた。大垣の築造にあたっては、大垣心から北約18mまで旧地表を削り、南に次第に下げてきており、北約8mの地点から南は地山をあらわしている。勾配は急で18m間で0.8m下がっている。整地は大垣の南にまで及ぶが、大垣の南4mからは水田耕作のために攪乱されている。こうして整地した上に大垣の中心部では入念に、これをはずれた位置では大まかに土を積む。大垣中心部は削り出した地山面をさらに0.2m掘込み、黄褐色粘質土や砂質土を0.05~0.1mの厚さで版築している。残存状況が良好なところでは9層、厚さ約0.6mある。北側埴地は、0.1~0.3mの粘質土や砂質土を2層ないし3層おき、おおむね水平にしている。

大垣の北約13mで検出した瓦とバラスを敷いた施設(SX2333)は幅1.2mで東西方向に連なる。整地土をわずかに掘りくぼめ、バラスを敷いた上に丸瓦片や平瓦片を敷いている。排水施設と考えられ、大垣からこのSX2333までの約13mの間は平坦で、何らの遺構もみられず、北面大垣の埴地である。

### SD2303 (PLAN.20)

6ABA区中央で検出した東西溝である。幅は一定でなく、狭いところで1.5m、発掘区西端では広く、4.5mある。きわめて浅い(深さ0.1m)。平安時代の遺物を含んでいる。

### SD2323 (PLAN.20)

6ABA区北際の東西溝である。上幅4.5m、深さ0.8mである。堆積土は大きく3層に分かれるが、いずれの土層にも砂や礫を含んでいる。最下層から中世の土器片や瓦片が出土している。超昇寺銘軒平瓦が1点出土している。

### SA2330 (PLAN.20, PL.33)

SA2300構築前に宮の北面大垣として設けられた掘立柱東西塀で、5間分検出した。柱間寸法は3.0m(10尺)等間である。柱掘形がSA2300の版築の下にあるため、SA2330の全容をあらわすことはできなかったが、明らかにし得た東第2柱掘形は長方形(2.4m×2.1m、深さ1.1m)である。柱根は残存しない。この塀SA2330を築地SA2300に改造した際に地山まで削平整地しているため、地山面から下1.2mが掘形の底となる。築地を構築する以前の掘立柱塀を明確にしたのは、この地区のみである。



## G その他の地区

上述の各地区以外の遺構について述べよう。発掘調査は第25—2, 34, 52—2, 58, 62次の各調査地で行なった。いずれも宮の大垣および西一坊大路を確認するための調査である。北面大垣確認の調査は御前池の東で行なった第34次と第62次の調査であるが、両次ともに後世の攪乱が著しいため、大垣の確認はできず、第62次調査地ではその他の遺構も何ら検出できなかった。第25—2, 52—2次調査地では、宮の西面外堀と西一坊大路を確認した。第25—2次で検出したSD3698は、大路の西側溝と考えられ、路面幅が約21.5mであることを確認した。第58次調査地は、西一坊大路敷にあたる地域であるが、後世の攪乱のため遺構は検出できなかった。

### i 第25—2次 (Fig 8)

#### SD3697

発掘区東端で検出した南北溝。西岸を検出したが、東岸は発掘区外のため溝幅はわからない。西岸に護岸施設はなく、緩傾斜で掘られている。深さは0.77mある。玉手門中軸線とSD3697西岸との距離は約12mあり、宮の西面外堀の位置にふさわしい。

#### SD3698

SD3697の西約21.5mの位置で検出した南北溝(幅約0.9m, 深さ0.1m)。埋土から奈良時代の瓦片や土器片が出土している。SD3697の溝幅を他地域で検出した溝幅と同じく3~4mとした場合、両溝の心々距離は約24mである。SD3698の西に接して右京二条二坊二坪の東面築地が設けられた場合、犬走り5尺、築地基底幅の半ば3尺を加えた位置から玉手門中軸線まで約37.5mを測る。この距離は宮の東面で確認した東一坊大路37.3mに近似する。

#### SD3699

SD3698の西8mの位置で検出した南北溝(幅約4m, 深さ0.6m)。埋土から奈良時代の瓦片、土器片が出土している。水流が多かったためか、溝幅は一定でなく、溝底には凹みがある。

### ii 第52—2次

#### SD6200

P・R両地区で発掘区の東端に検出した南北溝。溝幅はP地区では約3.8m, R地区では約3.1mある。深さは両地区ともに浅く、0.2~0.3mであるが、この溝と宮の西面大垣SA1600までの距離は約10mあり、この溝は宮の西面外堀にふさわしい。

### iii 第34次 (PLAN 21)

#### SD4315 付 SK4326

D地区で検出した東西溝。発掘区の東西両端部では攪乱が著しい。中央部での幅約2.2m, 深さ約0.5mある。埋土から中世以降の土器片が出土した。南側のSK4326は近世の土壌である。

#### SK4319

C地区南端部で検出した土壌。発掘区外へ広がるため、規模は確認できないが、南北5m以上(深さ約1.4m)の大きなものである。底部で東西溝(幅1.3m, 深さ0.5m)を検出した。

#### SE4325

C地区中央部にある石と瓦を組上げた円形井戸。底部の内径約0.6m, 深さ1.3mあるが、組上げの残存部0.9mである。中世の井戸である。